

書籍紹介

『Forrester, D. J. and Spalding, M. G. (2003) Parasites and diseases of wild birds in Florida, University Press of Florida』

浅川 満彦[†]

酪農学園大学 獣医学群

本書は米国フロリダ州において留鳥、渡り鳥、迷鳥などとして自然下で記録された鳥類から得られた（あるいは、鳥類で経験された）“parasites”と“diseases”に関して、一次資料（後述）を基に、当地の関係者が一般に認識しているようなグルーピング（注：ペリカン類、サギ類、コウノトリ類、ハゲワシ類などの23グループに分け、それらが独立章を構成。厳密な鳥類分類に従うものではない）ごとに詳述される構成であった。各章末には引用文献表が完備しているので二次資料（後述）である。2003年刊行なので、引用された文献は前世紀中ごろから2000年最初頭のものが中心となる。したがって、少々旧いのではないかという懸念もあろうが、本書の後継となる書籍は存在しないと目されるし、もし、日本でも同様な二次資料を刊行する場合（そして、刊行を強く望まれるが）、参考になる。



本書表紙（左）と背表紙（右）

題名の“parasites”には、ウイルス・細菌・真菌・原虫・蠕虫・節足動物に起因する寄生虫病を含む感染症の病原体であることは容易に想像がつくであろう。一方、“diseases”の方は生物毒・化学物質・鉛弾に起因する中毒を含む非感染症のほか、通常、疾病とは見なさない奇形・餓死、電線・車両等人工物への衝突、天候・捕食（“托卵Brood parasitism”含む）なども含まれ、各章の中で独立項目が形成されていた。要するに、当該鳥類の異常に関して一次資料が存在するものは、すべて、本書で網羅しようというのがその目的である。中には、刊行時点で、死因不明とされた記録や鳥類グループによっては、ヒトや家畜・家禽への影響（昨今、注目のワンヘルス・アプローチ。本書ではこの語はない）についても言及されていた。

本文では、紙面の都合があるので、日本の鳥類臨床家にも参考になると考えられるカモ類、ハト類、フクロウ類およびスズメ類の章で扱われた日本の寄生虫（病）学で扱われる「原虫・蠕虫・節足動物」に関する部分のみの概要紹介をする。さらに、コリンウズラとシチメンチョウ章には狩猟鳥繁殖事業にも有用な情報も含まれたので追加する（事業者は最寄りの鳥類臨床家には必ず相談するものだ）。なお、愛玩鳥の中心となるオウム類（パラキート）については、本書ではキツツキ類やカッコウ類などとともに、その他鳥類の章で扱われていたが、“parasites”

[†] 連絡責任者：浅川満彦（酪農学園大学）〒069-8501 北海道江別市文京台緑町582番地 E-mail: askam@rakuno.ac.jp

の情報は無かった。

カモ類の章で当該箇所は337頁から358頁にあり、まず、血液原虫ヘモプロテウス（註：日本の教科書・成書でカタカナ書きの学名がある場合、そのまま記す。以下、同様）とロイコチトゾーンは普通で、呼吸器性クリプトスポリジウム症、（アイメリア属による）腎コクシジウム症、（終宿主スカンクからの）ザルコシステイス症などの記録が列挙された（註：本書ではザルコシステイス属のオーシストが糞便に排出という表記が、この章を含め散見されたが、これはスポロシストの誤り）。疑陽性が多いとしているものの、本章含みほぼ本書全章でトキソプラズマIHA試験結果が紹介されていた。日本では鳥類でこの原虫の検査はあまり行わないが、北米では普通に行うことが推し量れた。さて、トキソプラズマであるが、フロリダ産カモ類ではその一次資料は無いようだが、そのような場合でも米国や国外の文献を引用して解説をしている（ここではアルゼンチンにおける検査事例で半数の個体が陽性などと紹介）。蠕虫では住血吸虫トリコビハルジア属、胃虫アミドストラム属・テトラメレス属が普通で、時に、致死的なエウストロンギリデス症の報告があり、いずれも評者（浅川ら）がほぼ経験している事例であった。一方、節足動物の項に記述された *Rhinonyssus* 属の鼻腔ダニあるいは養鶏場から野生カモ類に感染したと目される *Echidnophaga* 属ノミなどは、そもそもそのような観点で我々（浅川ら）は調査をしていなかったの（強く悔やまれる）、今後の検査のヒントとさせて頂く。

ハト類の章で寄生虫（病）関連は803頁から828頁にあり、本研究会でもたびたびその高い病原性が報告される“トリコモナス症 *Trichomonosis*”（註：本書で病原体名は“*Trichomonas gallinae*”。感染状態は *Trichomoniasis*）から始まっていた。米国でもこの疾病がそれ程までに深刻であることの証左であろう。そして、米国でも外来種となるカワラバト（＝ドバト；1600年代初期移入）からの感染であることは、日常的に鳥類と接するものはあらためて注意すべきメッセージと捉えるべきである。また、この原虫病は鳥類大量死の原因の「片割れ」とされ、ハトパラミクソウイルス1型との混合感染により在来種のハト類（註：リョコウバト絶滅原因の一つ！；

808頁）や捕食者である猛禽類などが犠牲になっているという。我々はカワラバトの特異的な線虫として *Ornithostrongylus* 属を認識していたが、他の鳥種では貧血やカタル性腸炎になるというのも実に参考になった。この線虫は毛様線虫類なので感染幼虫が経口的に容易く感染してしまうので、ハト以外の偶発的な寄生も注意したい。さらに、本章末尾には“害鳥・公衆衛生の危険性”という項（註：820頁と828頁。途中、寄生虫検出記録の一覧表が挟まる。ここに限らず、本書は一覧表の頁が占有）があり、ここだけでも同じ外来種（ドバト）が蔓延の日本でも大いに参考になろう。

フクロウ類の章で関連するのは849頁から868頁であったが、ここでも上記で紹介したトリコモナス症が登場していた。ドバトを捕食した在来フクロウ類がこの感染症で斃死していたが、その部に、野鳥疾病がもっとも最初に公表された1954年、その記録がハヤブサ類のトリコモナス症であったという記述が見えた。まさに、トリコモナス症は野鳥疾病の記念碑的存在であろうか。ところで、フクロウ類は齧歯類を捕食するため、齧歯類寄生のアイメリア属原虫（オーシスト）あるいはポロセファルス属舌虫（若虫）が糞便や消化管から検出された。これは餌資源に寄生していた寄生虫が、捕食者の消化管に見つかる偽寄生というもので、時に誤診（落とし穴）の原因となる。日本でも増え始めたフクロウ・カフェの個体を診る臨床医は頭の片隅に置いて欲しい。

スズメ類の章で関連するのは932頁から961頁で、ここではイソスポラ属やアトキソプラズマ属原虫の記録が出ていた。また、*Ixodes* 属寄生によるダニ麻痺や *Knemidokoptes* 属による疥癬が問題視されていたことも、半自然環境下などで飼育されるフィンチ類などスズメ目愛玩鳥類の診療現場では参考になると考えられるが如何であろうか。

コリンウズラとシチメンチョウの両章で関連するのは、それぞれ525頁から544頁および575頁から663頁にあった。いずれの鳥種とも人工施設内で繁殖させ、野外に放鳥されるので、こういった鳥個体からのマイナス影響について検討された項も両章末尾には追記されていた。この追記情報は日本のいくつかの自治体でキジ・ヤマドリを狩猟用として繁殖・放鳥している場面でも有用なものになるだ

ろう。1960年代から1980年代でも野生下シチメンチョウのヒストモナス原虫保有率は1%未満で、それ以降も極めて低下している（本当の意味の教科書的な疾病なのだと実感）。コリンウズラに至ってはこれよりも低い保有率で、この原因原虫のキャリアであるニワトリ盲腸虫の寄生率が両鳥種とも極めて低いことが遠因と考えられている（せいぜい数%）。紛らわしいことに、コリンウズラに限っては、同属別種“*H. isolonche* (= *H. bonasae*)”が高寄生率で寄生する。そして、この種はヒストモナス原虫を媒介しないというので、両線虫種鑑別はきちんとしたい。シチメンチョウのヘモプロテウス症では致死例含むミオパシーがよく知られるが（註：我々は、前世紀末、ウミネコにおけるこの原虫の記録をした際、同様に、この点についても言及していたので、とても懐かしい）、この原虫が半数の赤血球に寄生していても（！）貧血症状を呈さないというのは純粋に驚かされた。なお、シチメンショウにおける線虫 *Trichostrongylus tenuis* (= *T. cramae*) や *Dispharynx nasuta* の寄生率・病原性は高く（前線虫種はコリンウズラでも高い）、時に消瘦あるいは胃炎の原因となっているようで、油断はできない。

ある地域鳥類を保全・保護をするためには、まず、現存する個体あるいは個体群の維持を図る（生息地内保全）。もし、ある個体群で危機的な縮小が確認された場合、個体をこの個体群本来の場所から、別の場所で人工的な飼育・繁殖をして、ある一定数が確保されたら、元の生息地に放す（生息地外保全）。これら両保全活動で共通する必須情報が、個体の死因あるいは個体群の死滅要因である。これらを知らないと、眼前の個体（群）は減り続け、新たに放した個体もその地域に根付かない。そこで、そのようなマイナス要因を網羅した基盤情報が求められるが、これは次のような過程で現出する。

1) 死体分析し某感染症の病原体（モノ）が検出され、病理学的にもその疾病を発症（コト）して死んだことが判ったら、2) その体現者は科学的事実として論文（一次資料）を公表する。3) そして、ある程度一次資料が集まったと判断された時点で、その体現者か「大御所」などにより総説やチェック

リスト（二次資料）が作成される。

以上1) から3) のように、モノゴトをきちんと解析出来、最終的には一次資料を刊行する能力（執拗さ）を備えた蛸壺的研究者と、数多資料を渉猟し二次資料を編集する気力を備えた総合的研究者が不可欠となる。本書はその賜物である。フロリダは豊かな米国の構成州の一つで、しかも、国内屈指の野生動物生息地を抱えていたから、このような僥倖がもたらされたのだろうか。いや、ある程度、経済的に余裕があり、様々な野鳥が生息するのに、その研究に徹したら飢死する危険性があり、運よく飢えない立場になっても、論文（一次資料）を書かなくなる手合いがいる、どこかの極東の島国のような例もある。したがって、豊かな資金と生物相さえあれば、本書のような優れた二次資料が自然に出来上がるわけではないのである。鳥類の臨床家は、日々の診療では、一次資料に相当する知見に遭遇しているはすなので、公表を心がけて欲しい。

本書各論で多くに共通する記述として、寄生虫記録はあっても、その生活史や病原性は不明と云うのが少なくなかったが、それでも一次資料を残していた。繰り返すが、本書のような二次資料は、こういった個々のデータが無いと成立しない。病気の自然史（誌）はいまだ道半ばであること認識し、ご自身がその当事者として自覚を持ってほしい。「自分の体験したことは不完全なので、公表なんて鳥癖がましい」などと言っていては、永遠に公表はありえない。

以上のように、本書が鳥類臨床の場でも有用な参考書なのだが、本書は酪農学園大学以外の国内大学では所蔵無しであった。これには所蔵情報秘匿ということも含まれるそうだが、鳥の疾病本を秘匿する必然性は理解しがたいので、所蔵が無しの解釈で正しいのだろう。そうすると、皆さんが図書館から借りだすのは難しい。しかし、本書はネット販売されているようで（2019年2月現在）、定価125米ドルがアマゾンの中古本では約三分の一になっていた。必要ならばご購入を検討して頂きたい。最後に、本書所蔵確認をして頂いた酪農学園大学附属図書館・川端幸枝司書に深謝する。